

北信濃里山通信 vol.15

2014年2月14日発行

巻頭言 「オオルリシジミが飯山地区で生き残るために」

元・松本市山と自然の博物館館長 丸山 潔

オオルリシジミはなぜ日本の一部のみに生息していたのだろうか？・・・以前から、なぜその地に生息し、その後生息地が減少してきたのか、疑問に思っていた。

オオルリシジミの世界的分布を見てみると、朝鮮半島を中心に中国・ロシアの一部及び日本に分布しているだけの特殊な分布を呈している。いずれの生息地でも、個体数は減少しているという。



日本では近年まで、長野県の各地と東北の青森・岩手県、また遠く離れ九州阿蘇・九重に局所的に分布し、個体数も多かった。

しかし1960年代頃から始まった圃場整備や草原の喪失が進むにつれ、徐々に生息地が失われた。

1970年代には、東北地方は絶滅、1990年代には、多くの生息地を育んだ長野県でも安曇野や東御市を残し絶滅寸前まで追い込まれた。

2000年代初頭は、九州・阿蘇山麓でのみ、安定した生息地が確認されるだけになってしまった（右の写真は、オオルリシジミが生息する阿蘇山山麓の広大な草原）。



その昔、日本は大陸と陸続きで、現在大陸で見られる多くの動植物が日本列島に分布を広げたとみられる。その中で、食草のクララ（右の写真）も日本列島に分布を広げ、それに伴いオオルリシジミも日本列島各地に分布していたが、その後の地殻変動や何度か訪れた氷河期の影響で、環境変化にさらされた多くの産地で絶滅し、残された環境にしがみつこうようにして生き延びたと推察される（このような種を「遺存種」と呼んでいます）。

オオルリシジミは残された環境でどのように生き延びたのか？・・・なぜ日本列島に特殊な分布を示していたのか考えると、それは人間との関わりを持ち、近年まで人間がクララとともにオオルリシジミの個体を維持してきたからである。



人類が定住し、土地利用をするようになると、狩りや農耕をするため、野焼きを頻繁に行い、草原を維持してきた。草原を生息環境としているクララは、野焼きの刺激により発芽が促進され、分布を広げるには好都合だったと思われる。また、クララの根は、「苦参(くじん)」と称され、消炎・鎮痒作用、健胃作用がある漢方薬の一種として利用されてきた。また、草の煎汁は、牛馬の皮膚寄生虫駆除薬に用いられたほか、近年までウジ殺しとしても使われていた。

この様な便利な薬草を、人類が日本列島に移り住み、この頃から住居の近くに栽培していたと考えれば、遺跡の近くや集落の近くにオオルリシジミの産地があるのもうなずける。

また、オオルリシジミの生息地には、家畜として牛や馬が飼育されていた。クララは牛馬にとっては毒草であり、食べずに残してくれた。

食草をクララのみ依存しているオオルリシジミにとって、最大の環境維持は牧場の存在と考える。オオルリシジミが生息していたところは、遺跡と広大な牧場があったところである。平安時代、朝廷が勅使牧として長野県や東北地方の青森・岩手県に畜牧場を多く管理していた。その地方ではその頃の名残として一部地方では草競馬が行われ、馬肉を食す風習が残っている。

牧場の縮小とともに、オオルリシジミの生息地も徐々に減少し、現在に至ったと考えている。

その昔、牧場が繁栄していた頃、長野県各地でも阿蘇山山麓のように多くのクララが繁茂し、オオルリシジミが乱舞していたことだろう。

長野県の生息地で、広大な土地利用ができるところは飯山地区と考える。

そこで、オオルリシジミの生息地に牛馬の牧場を作ることを提案したい。



※右上の写真は木島平村カヤノ平での牛の放牧風景です。木島平村では、遊休農地の荒廃地対策として食肉用の羊の放牧なども行われていますが、会で検討している生息地のカヤ場利用など、土地利用による草原環境の維持を今後とも考えていきたいものです(事務局)。

昨年11月16日に予定していました里山再生活用プロジェクト戸狩カヤ刈りワーキング「わたしをカヤ刈りに連れてってin戸刈温泉スキー場は」は、その週に降った大雪による積雪のため中止としました。雪でカヤ(ススキ)が倒れ、埋もれたほか、採草地の「とんだいら」への通行も困難だったようです。

カヤ刈りは、ススキが枯れ上がったからの刈り取りが好ましく、この秋は暖かく、木々も十分紅葉・落葉しないまま降雪・・・刈り取り時期の難しさを実感しました。

提携先の「(株)小谷屋根」さんからは、当地のカヤの品質については好評価をいただき、準備を進めていただけに残念でしたが、次年度以降、採草地や開催日を複数考え、実施したいと思えます。



お知らせ

「定期総会」と「ブナの森雪山観察会・スノーシュー体験」の開催

本年度の当会の事業実績と来年度の事業計画を協議いただくため、以下のとおり「定期総会」を開催します。来年度は、オオルリシジミの保全活動のほか、生息地のカヤ場利用や、米生産者の方と協働した田んぼの生きもの観察など、関係の方々と連携した里山の保全活用を計画したいと考えます。会員のみなさんからも、観察会や学習会などの要望・意見をお寄せください。

また、同日、「ブナの森雪山観察会・スノーシュー体験」を企画しました。スノーシューの歩き方の基礎を学びながら、なだらかなコースで、雪山ウォーキングを楽しみます。ふるって御参加ください。

- 1 開催期日 平成26年3月8日（土）
- 2 開催場所 なべくら高原「森の家」
飯山市なべくら高原柄山 TEL 0269-69-2888

3 日程

(1)「北信濃の里山を保全する会 定期総会」

10:30～ 受付

11:00～ 開会、あいさつ

議事（当年度事業報告・収支決算、次年度事業計画・収支予算など）

12:00 閉会

(2)「ブナの森雪山観察会・スノーシュー体験」

12:30～ 受付

13:00～ 開会

「森の家」周辺を周回しながら、雪山の植物などを観察します。

ガイド：井田会長、「森の家」スタッフの方

15:00 閉会



「森の家」HPより

4 参加費 無料

5 服装・持ち物

「雪中歩行」に適した服装（帽子、サングラス、防水性手袋、スパッツ、冬用防水靴）、ザック（飲み物、行動食など）。スパッツ、靴、トレッキングポール（杖）はレンタルもあるそうです。スノーシューは当方で用意します。

6 申し込み方法

参加を希望される方は、飯山市公民館・飯山市教育委員会生涯学習課（TEL：0269-62-3342）へ2月25日までに申し込んでください。

7 その他

昼食は「森の家」でも用意できるそうですので（一食600円）、注文される方は参加申し込み時に、その旨お伝えください。当日、小雪程度では実施しますが、猛吹雪など中止すべきような悪天候が予想される場合は、当日の朝までに連絡します。

活動報告

・オオルリシジミ生息地の環境整備

2013年の最終作業として11月24日に、オオルリシジミ生息地の環境整備・灌木の刈り払い（保護区設営ロープと看板は事前に降雪前に会員の三井さんに撤収いただきました・・・）を6名で実施、その先々週に降り積もった雪も解け、何とか作業を行うことができました。今回は、生息地の最上段を中心とした刈り払い作業で、このエリアも以前はオオルリシジミがよく見られた場所でしたが、カラマツが生えだし（写真右：紅葉はきれいでした・・・）、森林化が進む状況です。1日の作業で予定箇所を終了、続きはまた、雪解け後の春に実施します。



灌木の刈り払い作業



作業後、周囲が見渡せるようになりました。

編集後記

昨年の11月9日、日本鱗翅学会の第60回大会が大阪府立大学（堺市）で開催され、研究集会で「絶滅回避を目的としたオオルリシジミの放蝶による生息域外保全の試み」と題して、話題提供をしてきました。会で行っている域外保全の取り組みも、滅びゆく蝶の行く末を考えるとやむを得ないもので、一定のルールのもとで実施することに理解いただくことができましたと感じます。全国各地で蝶の保全活動に取り組む方々とも、情報交換することができましたが、今後、理念の共有を進めていければと思うところです。

会の活動も3年目が終わり、来シーズンに向け、会員のみなさんの多角的な視点で北信濃の里山を見つめながら、里山の自然が持つ多様な価値を発見、共有できればと考えます。

発行者：北信濃の里山を保全活用する会 会長 井田秀行
事務局：〒389-2253 飯山市大字飯山1436-1
飯山市公民館内
TEL：0269-62-3342 FAX：0269-62-5940
E-mail：kouminkan@city.iiyama.nagano.jp
編集者・事務局長：福本匡志